

白髪一雄と仏教—《観音普陀落浄土》を中心に

貝塚健

1. はじめに

20世紀の日本美術のなかで、仏教思想の影響を受けたものは少なくない。6世紀、日本に伝来した仏教は、奈良時代には律令国家を支える思想として位置づけられ、大陸から次々にもたらされる新しい宗派や思潮を受容しながら、1400年間以上にわたって、古来の宗教感情と混淆しつつ日本化と変容、多様化を遂げた。明治維新以降、政教分離の原則から、社会の表舞台から仏教は姿を消したかに見える。しかし、日本民族の心性や論理構造に染み込んだ仏教思想は、拭い去ることはできない基層をなしている。20世紀後半以降、仏教の尊像をそのまま描くような絵画はほとんどあらわれなくなった。しかし、密教、浄土教、禅など、日本でゆたかに展開した仏教思想は、多くの美術家の作品制作と生き方にその影響があらわれている。古代以来の仏教絵画の伝統を受けつないでいる膠彩画（日本画）だけではなく、油彩画あるいは前衛美術のなかにも仏教の痕跡を見出すことができる。現代においてもまだ、仏教は生き続けているといえるだろう。

そのなかで白髪一雄（1924–2008）ほど、本格的に仏教と取り組んだ美術家は他にいない。47歳のときに比叡山延暦寺で得度し、数年間にわたって天台僧としての修行と儀礼を修めた。アトリエの一隅に不動明王像を祀り、作品制作の前には必ず不動真言と般若心経を唱えた。1970年代の白髪は、仏教を作品主題の中心とする。白髪没後の2009（平成21）年から翌年にかけて開催された回顧展「白髪一雄展—格闘から生まれた絵画—」（安曇野市豊科近代美術館、尼崎市総合文化センター、横須賀美術館、碧南市藤井達吉現代美術館を巡回）は、2004（平成16）年に計画された白髪自身による展示コンセプトをもとに平井章一が監修したものであるが、その実現しなかった自選展の構成は、過去の回顧展がそうであったような時系列に作品を並べるものではなく、以下のように、自作を主題別に7つのグループに分けるものだった¹⁾。

1. 水滸伝豪傑シリーズ
2. 合戦シリーズ
3. 中国古代歴史シリーズ
4. 密教シリーズ
5. 自然シリーズ
6. ウーマンパワーシリーズ

7. 透明油絵具によるシリーズ

これを見ると、白髪の作品制作にとっての天台密教が、中核の一つを占めていたことが看取できる。

1977（昭和52）年、白髪は父の死を機に、尼崎で長らく呉服商を営んだ父とゆかりのある尼崎商工会議所に《文殊菩薩供》（fig.1）を寄贈した。1975（昭和50）年に制作されたこの作品は、白い地に大きく円相を描いた抽象絵画である。その寄贈にあたって、白髪は『尼崎商工会議所報』に文章を寄せた。

この絵は特殊な道具をつかって円輪を描いたもので、偶然に出来る厚い白い絵具の層の混りと凹凸が要素となって清楚な感覚とぐるぐる廻転する円輪が観る人に一種の迫力となって伝わることと思います。そしてこの円輪を描くときは精神統一をして、文殊菩薩のお姿を思い浮かべ、それを円輪に託して一気にぐるりと描いたものであります。だから作品は精神統一を具体化したもので文殊菩薩を象徴して居ります。そして文殊菩薩を供養するために描かれた抽象の佛画といえます。私はこの四、五年この様な現代の佛画を抽象でいろいろ描いて参りました。火のような激しい赤色の絵具の流れで不動明王を、太陽のぐるぐるめぐるような廻転の大画面

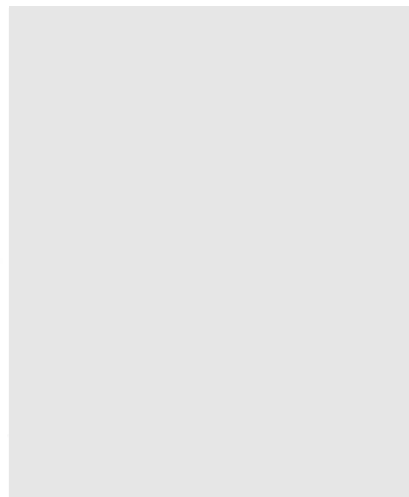


fig.1
白髪一雄《文殊菩薩供》1975年、アルキド絵具・カンヴァス、尼崎商工会議所蔵

で大日如来を、深い泥の中に白く咲き出さんとする蓮華で法華経を現したものを等を描いて参りました。とくにそれらの中、円輪の廻転のぐあい一つで佛菩薩の悟りの世界を表現することは至難なことで自分の心の状態の安定が絶対必要であります²⁾。

この作品を「抽象の佛画」と呼んでいることは興味深い。白髪はもちろん古代以来の儀軌にもとづく尊像を熟知していたのだが、それらとはまったく異なる抽象表現を「仏画」だと言い切っている。この時期、白髪作品制作はそのまま宗教体験の吐露であった。如来や菩薩、経典を思念し、それを抽象画として現出させていった。とくに1974(昭和49)年夏以降、円相(円輪)が白髪にとって大きなモチーフとなる。

得度の翌年である1972(昭和47)年から、ふたたびフットペインティングに帰属する1980(昭和55)年前後までが、白髪が仏教ともっともがっぷりと格闘し取り組んだ時期である。この時期のほとんどの作品は仏教のさまざまな要素を主題とし、作品名にそれとわかるものを選んでいる。だがその前後も、仏教から距離を置いていたわけではない。白髪の画業全体を通じて、仏教は大きな意味を持ち続けていたのである。

以下、本稿では、白髪と天台仏教との関わりを整理し、ブリダストン美術館が所蔵する1972(昭和47)年の作品《観音普陀落浄土》の位置づけを考えてみたいと思う。

2. 白髪一雄と天台仏教

白髪自身によると、仏教に関心をもったきっかけは30歳代のときにイノシシ狩りで目にした板碑に彫り込まれた梵字(サンスクリット文字)だったという。刀剣や銃を愛好した白髪は、アメリカ製の薬莖が飛び出す連発銃を東京市ヶ谷で買い込み、作品制作の素材にするため、尼崎市の猟友会に加わり兵庫県能勢や京都府雲ヶ畑方面へのイノシシ狩りに参加するようになった。いつ頃のことかは、はっきりしないが、結局イノシシが獲れずに大阪の日本橋一丁目にある猪肉店で毛皮を購入し、それらを画面に塗り込んで《猪狩(巻)》(東京都現代美術館蔵)と《猪狩(弐)》(兵庫県立美術館蔵)を制作したのが1963(昭和38)年であることから、その少し前ということになる。白髪が38歳前後のことである。これは、白髪が読売新聞記者に「密教に関心を持ち始めたのは昭和三十七年ごろから」³⁾と語っているのと一致する。

イノシシ狩りの合間に白髪は、山中に点在する石碑、板碑にあるサンスクリット文字に吸い付けられていった。サンスクリットについては以前から興味を持っていたようだが、大阪平野の北側の山野で見たそれらが密教への入り口になったという。白髪家の菩提寺・本興寺は日蓮宗である。密教を仏教書によって学ぼうとしたが、どうしても飽きたらないものを感じた。より本格的に学びたいと思い、知人の僧に紹介されたのが、滋賀県大津市坂本にある滋賀院門跡の門主・山田恵諦(やまだ・えたい、1895-1994)である。1970(昭和45)年11月のことだった⁴⁾。滋賀院はいまも、比叡山延暦寺の一山(他宗における塔頭寺院のこと)のなかでもっとも重要な門跡寺院の一つである。

山田恵諦は、1895(明治28)年12月1日、兵庫県揖保郡斑鳩(はんきゅう)村鶯(いかるが)(現・兵庫県太子町)に、農業・山田豊吉の四男として生まれた。俗名・信治。1904(明治37)年、天台宗の法華山一乗寺の東谷実秀を戒師に仰いで、延命寺(兵庫県飾磨郡御国野村)で得度を受ける。1920(大正9)年、天台宗西部大学を卒業。卒業論文は「伝教大師と日本神道」だった。その後、延暦寺一山の戒定院(横川飯室谷に所属)住職、瑞応院住職、天台宗教学部長、天台宗勸学院院長などを歴任。白髪が訪ねた後のことになるが、1974(昭和49)年、第253世天台座主(ぞす)となり、1994(平成6)年2月22日に98歳で遷化するまで20年間その地位にいた。座主在位中の1987(昭和62)年8月、比叡山開創1,200年を記念して比叡山宗教サミットを開催。カトリック教会やイスラム教、儒教など世界七大宗教の指導者を比叡山に招いてともに世界平和を祈願した。著作も多い。全日本仏教会会長も歴任し、その行動力から「空飛ぶお座主」と呼ばれた。

この山田恵諦に、白髪は即座に得度を勧められる。白髪はのち、こんなふうに述懐している。

二時間ほど話をするうち、山田座主は「あんた、よう知ってるやないか。坊さんになりなさい」と勧めるのである。家庭があるので即答することは出来ず、家内に相談してみれば「なればいいじゃない」とあっさりだった⁵⁾。

半年後の1971(昭和46)年5月、山田恵諦を戒師にして白髪は延暦寺横川(よかわ)の元山(がんだん)大師堂で得度し、素道(そどう)の法名を授けられた。得度は天台僧としての出発点に過ぎない。その後の階梯について、天台宗公式ウェブサイトは、簡にして要を得た分かりやすい説明

をしている。

「天台僧侶になるには」

天台宗の僧侶になるには、師僧となる僧侶が必要となります。次に、師僧の許可を得て、得度します。得度とは髪を剃り、僧侶としての生まれ変わり、仏道に帰依する誓いをたてる式です。このとき法名をいただき、それが僧侶としての実名になります。

次には修行の期間があります。これも師僧の許可を受けて、比叡山に登り、天台僧としての基礎的な教義や儀式作法を習得する、前行（ぜんぎょう）と四度加行（しどげきょう）という密教修行を中心とした行を履修しなければなりません。この修行を行う場所が行院（ぎょういん）です。現在はこれが終われば正式な天台僧として認められます。しかし行はこれだけに止まるのではなく、さらに入壇灌頂（にゅうだんかんじょう）、開壇伝法（かいだんでんぼう）、円頓受戒（えんどんじゅかい）、広学豎義（こうがくりゆうぎ）などを受けることも必要です。いずれも師僧や宗内の手続きに従ってこれらの行を履修することが決められております。⁶⁾

白髪はのち、これらの修行のうち順に四度加行、入壇灌頂、広学豎義を数年間かけて修めている。時間を追って得度以後の、白髪の作品制作と仏道修行の交差する様相をたどってみよう。

得度した翌1972（昭和47）年春、白髪は《東方淨瑠璃世界》（兵庫県立美術館）と《観音普陀落淨土》（石橋財団ブリヂストン美術館）を制作し、7月にメキシコ、12月にイタリアの美術展に2点そろえて出品した。この2作品については後述する。

1973（昭和48）年1月、大阪の信濃橋画廊で「白髪一雄展一五大尊展」を開催し、五大明王図3組、全15点を発表した。一気に白髪の絵画世界を仏教が覆ってきたのが分かる。

その1年後の1974（昭和49）年1月、大阪の藤画廊において「白髪一雄個展一密教的色彩の展開」を開催。《大威徳尊》（尼崎市）、《摩利支天讃》、《不動尊》（延暦寺会館）など絵画15点を発表した。60年代の情念が渦巻くようなおどろおどろしい表現が影を潜め、足による描線と板状の器具を用いた描線が大きくくりになって画面が整理されてくる。

1974（昭和）年4月30日から6月3日まで、白髪は比叡山横川で35日間の四度加行を修めた。四度加行については、山田恵諦が記しているものを見よう。

加行というのは、密教の作法を伝えて修行させることで、密教には十八道、胎藏界、金剛界、護摩と四つの作法があり、昔は十八道を初年度として百日間加行（この間は行記を写しながら修行する）、百日間正行と二百日修行し、次の年に胎藏界と順次に四度に亘って修行した。そのため、正式には四度加行というが、後には全部を二百四十日間で行うようになり、さらに百二十日間、六十日間と次第に短縮され、いまでは三十五日間に四度を全部修行させて満行ということになっている。

朝三時に起きて、井戸端で水を被って身を清め、道場に入って修行と勤行、それがすむと道場を出て横川中のお堂を巡拝して帰り朝食（これを小食とってお粥に梅干一個、漬物二切れ）。十時に入堂して、日中座の修法と勤行。それが終わると昼食（正食とってご飯に一汁一菜、漬物）、午後二時に入堂して夕座の修法と勤行。修法は三時ともに同じであるが、勤行は三時ともに異なったものが課せられている。正午以後は歯を必要とする食物を口に入れることが禁じられているから、夕飯はもちろんない。ただし、初めの頃、体調を慣らすために葛湯を一椀あてがわれるが、一週間たつとこれも禁じられる。食事が乏しい上に、修行が厳しいため、体は痩せる一方、しかも行中は剃刀を当てることも禁じられているから、頭髪も髻ものび放題で、加行が終わる頃は、全く「出山の釈迦」といった姿である。それでも、修行の効能は大したもので、入行前は様子が分からずにおろおろしていたものが、眼は澄み、動作は落ち着き、自信に満ちた立派な坊さんになって下山してゆく。⁷⁾

長い年月をかけて比叡山延暦寺が磨き上げた、たいへん過酷な修行である。心身ともに重い負荷をかけ、天台密教の教えと作法を振り込むように会得させていく。2007（平成19）年9月6日に行われた加藤瑞穂と池上裕子によるインタビューでも、白髪は次のように四度加行のことを語っている。

この加行ってというのが一番大事でしてね [……] その投地礼拝を何百回とやらされるわけです。皆それにへこたれてしもてね。 [……] 日に三回、そのたびにこの投地礼拝を何百回くらいさせられたかな。三百回くらいかな、一回に。だから九百回くらいやってるわけですけど。それを一週間しないといかんねんね。そしたら一週間経ったら膝がもうねえ、こっち（右）のほうなんかもう腫れ上がって水が出そうで。こ

っち（左）はちょっとましやってんけどね。それでとうとう水出てね、治りましたけどね。痛くて痛くて、水が出たとたん。それで礼拝行は一週間で済んで、その次の行にまたかかるわけですけどね。十八道加行っていうやつがまた一週間、それから胎蔵界と金剛界を一週間ずつ、それから最後の一週間、五週目が護摩を焚く護摩行なんですわ。[……] 比叡山の行というのはね、わりと寝させないんですわ。睡眠時間がね。何でかっていうと頭に良く入るからって、習うことが。日に3時間くらいしか寝させないわけですわ、どんな行でも。だから戒法（かいほう）やってる人なんかでも、ものすごい寝る時間が少ないんですわ。戒行（かいぎょう）してる間とはとくに。その方が行がスムーズに行くし、覚えなといけないことが非常に速く覚えられる。それが理由なんですわ。そやけどやってるほうはたまりませんわな。日に3時間ほどしか寝られない。予習復習してたらどうしても夜の11時くらいになって、それから寝て、2時に起きなあかんわけです、ひどい時はね。⁸⁾

この四度加行に白髪は真摯に取り組んだ。その様子を目撃し、のちにそれを記している人物がいる。1990（平成2）年11月に大阪のカサハラ画廊で開催された「白髪一雄展」カタログに、当時、天台宗教学部長・比叡山瑞応院住職だった山田能裕が以下のような序文を寄せた。

もう十五・六年も前になるだろうか、千二百年の歴史を秘める比叡山にあって、僧として最初の「行（ぎょう）」に挑んだ白髪素道師が、北塔横川にある四季講堂の護摩堂で、満行を前に護摩の行法を修している懸命な姿に接した時、紅蓮の炎に浮かび上がった行者・素道師の表情は、不動明王そのものだったことが今も鮮やかに私の脳裏に残っている。

それは、白髪一雄が素道となった証であり、鮮やかな赤が、黄色を飲み込んでキャンパスの上をうねり、ほとぼしって強烈な印象を観賞者に与えた『天満星美髯公（てんませいびぜんこう）』や『達陀（だたん）』の世界を空間に実証した瞬間でもあった。

十代の若い修行僧でも、その厳しさに悲鳴をあげるといって「行」に、五十歳を越した身でもって真っ正面から取り組み、絶対に逃げない「求道心」の強さは、指導にあたった比叡の荒法師を感服させただけでなく、豊かな感性をもって「行」を昇華させていく一途さは、たちまち山

中各所に籠る行者の話題となり、指針ともなった。⁹⁾

白髪の修行姿は、行監（指導する僧）や周囲の行者に感銘を与えたという。ちなみに天台宗の多くの流派のうち白髪が修めた行は、山田恵諦の縁で、いまは受け継ぐものが少なくなったという穴太（あのう）流である。

加行を修めた白髪によると「まず、物覚えがよくなりましたわ」という。そして画家としての大きな転機を得ることになった。

一番大きな違いは、円が描けるようになったことだ。私は行を修める前まで、完全な円を描くことができなかった。それが修行し、密教を主題にした作品を描くようになって、ずっと円が描けるようになったのである。¹⁰⁾

加行以降の白髪の作品に、突如、スキージのような器具を用いて描いた円相（円輪）が増えてくる。60年代から白髪は円に強い関心を持っていた。円が描きたくても描けず、仕方がなく半円や扇形にしていたという。それが比叡山での加行を経験することで可能になった。その成果は、2か月後の8月、信濃橋画廊での「法華経のデッサン—諸法実相 白髪一雄作品展」で世に示された。

円は、禅僧による一筆書きの円相図から、白髪の師である吉原治良（1905-1972）による晩年の連作群にいたるまで、美術史のなかでさまざまに取り組まれてきた図形である。その円は、仏教においてもともと特権的な図像であった。そもそも法を説くことを「転法輪（法輪を転ずる）」ともいう。これはおそらく古代インドの転輪聖王の神話と関わっている。転輪聖王とは、チャクラヴァルティ・ラージャ（cakravarti-rajā）の漢訳で、輪を転ずる王の意と伝統的に見なされている。古代インドで伝説的に待望された帝王で、三十二相を具え、即位のとき天から一種の武器である輪宝（チャクラ）を得て、それを回転させて全インドを征服すると信じられた。転輪聖王に対する待望の念は、ヒンドゥー教徒、仏教徒、ジャイナ教徒を通じて共有されていたという。『因果経』は、阿私陀仙が生誕直後の悉多太子を占って「もし在家せば年二十九にして転輪聖王とならん。もし出家せば一切種智を成じて広く天人を済わん」といったと伝える。仏教において、1世紀に仏陀像が登場する以前、菩提樹や仏塔、蓮華などとならんで法輪図が礼拝の具体的な対象となった。法輪が仏陀のシンボルとなっていたのである。その仏教思

想に根付く円への憧憬や選好と、白髪 of 造形表現が結びついたのである。

白髪 of 仏道遍歴にもどろう。同年10月5日と6日、白髪は比叡山横川で入壇灌頂を受けた。この2日間の儀式のうちでもっとも重要なものが結縁灌頂(けちえんかんじょう)である。敷曼荼羅と呼ばれる胎藏界曼荼羅に向かつて目隠しされた受壇者が華(はな)という法具を投げ、落ちたところの仏と縁を結ぶという儀式である。白髪によるとほとんどの場合、中心に描かれている大日如来と結縁することになるという。

1975(昭和50)年6月から7月にかけて、兵庫県立近代美術館で「特別展・兵庫の美術家 抽象の4人—須田剋太・津高一・元永定正・白髪一雄」が開かれた。白髪は、《俱利伽羅》(1966年、福岡市美術館)、《青不動》、《法華三昧》、《切利天》(北九州市立美術館)、《あびらうんけん》(兵庫県立美術館、fig.2)、《文殊菩薩供》(尼崎商工会議所、fig.1)、《常行三昧》、《鬼子母神》、《大威徳尊》(尼崎市)、《元三大師供養》ほか計26点を出品する。最近作の多くは円相図だった。

同年11月、大阪の上本町近鉄百貨店で「白髪一雄展 法輪の儀式」を開催する。これもほとんどが円輪の作品だっただろう。

1976(昭和51)年2月、京都の朝日画廊で「白髪一雄展」を開催。《不動尊》(1973年、延暦寺会館)、《元三大師供養》、《あびらうんけん》(兵庫県立美術館、fig.2)、《サ・ダルマ・ブンダリーカ・ストラ》(1975年、兵庫県立美術館)、《文殊菩薩供》(尼崎商工会議所、fig.1)、《法華三昧》、《密呪》(1975年、尼崎市)ほかを出展する。

同年8月、信濃橋画廊エプロンで「白髪一雄 十界展」を開催し、《佛界》、《菩薩界》、《縁覚界》、《声

聞界》、《天人界》、《人間界》、《阿修羅界》、《畜生界》、《飢餓界》、《地獄界》を発表した。

1979(昭和54)年1月、兵庫県立近代美術館で「吉原治良と具体のその後」展が開かれ、白髪は《渡海》、《神変》の2点を出品する。前年に制作されたこの2作品は、数年ぶりに足だけで描いたものだった。ここにきてフットペインティングに白髪は帰帰する。主題も仏教を離れた。おそらくスキーなどを用いた円相を描き尽くしたという意識を白髪はもったのだろう。また、東京画廊の山本孝にフットペインティングにもどるべきだという助言をもらったことなどが、再びの転機の要因となったようだ。

制作上では仏教と距離を置き始めた白髪だったが、同年10月初旬、延暦寺において法華大会(ほけだいえ)に参加し、広学豎義を受けた。天台僧としての修行がひとつの区切りをつけることになる。法華大会は6日間にわたって催されるが、その中心は法華十講と広学豎義である。広学豎義は、968(安和元)年に良源(912-985)が創始した比叡山随一の古儀である。良源は、南都法相宗の学僧・法蔵と法論し論破したことによって天台宗の地位と信頼を高め、皇族や貴族の帰依者を増やして、当時荒廃していた延暦寺を復興させた第18世座主である。また教学を中心にして教団を立て直すことに成功した。慈恵大師(じえだいし)と諡号されるが、正月三日に遷化したことから元三大師(がんざんだいし)と呼ばれるほうが多く、またおみくじを考案した人物として庶民にも広く親しまれた。現在も天台宗において「お大師さま」といえば、宗祖・最澄(766-822、伝教大師)や諡号された他の名僧たちにおいて良源を指すことが多いという。その良源は、法論を重要視し、宗内で法華経を論ずる儀式を定めた。広学豎義は天台僧が修めなければならない教学を問答形式で判定する儀式で、いわば最終的な卒業口頭試問である。4年に一度開催され、全国あるいは海外からも修行僧が参ずる。直近の広学豎義は、2015年10月1日から6日まで開かれ、232人が受けた。受験僧である豎者(りっしゃ)に法華経から出される論題5つがそれぞれ事前に与えられ、豎者は独特の抑揚をつけてうたうように回答するべく十分な練習を重ねる。もちろん天台声明(しょうみょう)が基礎になっている。当日、試験官である5人の探題(たんだい)や已講(いこう)が判定をくだすわけだが、ほとんどが不合格となることはない。探題は座主などが務める。豎者が、探題らが待つ講堂の暗がりのなかに綱にぶらさがってとびこんでいくさまは、「まったくの偶然やけど、フット

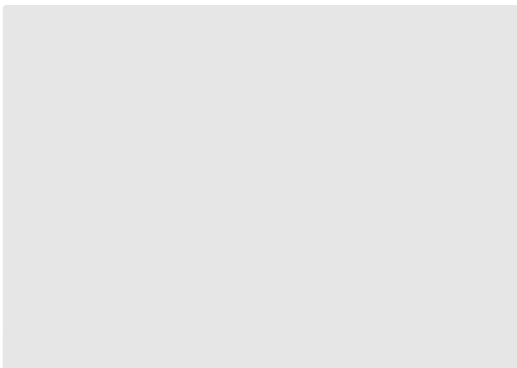


fig.2
白髪一雄《あびらうんけん》1975年、油彩・カンヴァス、
兵庫県立美術館所蔵

ペインティングのときと似たような姿勢」¹¹⁾ だったと白髪は述懐している。

たまたま、白髪が受けた1979(昭和54)年10月上旬の広学豎義を取材してルポルタージュにまとめたのが司馬遼太郎(1923-1996)である¹²⁾。初秋に法華大会を迎えつつある比叡山の人と自然の佇まい、広学豎義を控えた受験僧の緊張感や期待感、それを見守り支える家族や宗門の様子、広学豎義という儀式そのものの重みや味わいなどが、練達の筆で活写されている。そのなかで司馬は、以下のように記している。

在家といえ、こんどの法華大会で、阪神間に住む前衛画家の白髪一雄氏に出会った。むろん在家の人だが、発心して得度をうけ、法華大会にも出られたらしい。

さらに、叡山延暦寺の書院の前では、瀬戸内寂聴尼に出逢った。寂聴尼や白髪一雄氏というあざやかな発心の姿をみると叡山はなお俗世のひとを誘いこむ内容をうしなっていないのかと思ったりして、それなりの驚きをおぼえた。¹³⁾

広学豎義を修めたことで、白髪の手台僧としての修行は一応の完成をみた。修行によって作品制作上なにが変わったかと訊かれた白髪は、次のように語っている。

変わりましたね。まず円が描けたということ。それから皆に「なんか絵がすっきりした」って言われました。「お前、なんか前は血みどろみたいなんが多かったのに、なんかえらい清々しい。清潔になったなあ」って言われてね。吉原先生はもうそのとき亡くなってたんですが、これ(《東方浄瑠璃世界》1972年)なんかねえ、すっきりして。そういう絵が増えましたね。¹⁴⁾

一方で、白髪はフットペインティングに回帰する。1980年5月、東京画廊で「白髪一雄」展が開催された。《朧枝》、《鄴対》、《太丞》、《青波》、《燕皇》、《煬帝》、《紫皇》、《赤兎》、《赤烏》、《景初三年》、《普門品 雲雷鼓掣電》(茨城県近代美術館)、《咸陽》を出品する。作品名から判断すると、仏教モチーフは《普門品 雲雷鼓掣電》のみである。むしろ中国史あるいは東洋史、東洋思想に取材した作品が俄然多くなった。

以後、仏教の主題は、白髪の絵画世界から後景化していく。より広く東洋文化全体と取り組むようになるのである。しかし、仏教からまったく離れきってしまったわけではない。作品制作の前に

必ず般若心経と不動真言を唱えていたのは前述したとおりである。具体的にも、1983(昭和58)年の《懷素上人》(兵庫県立美術館)、1987(昭和62)年の《執金剛神》、1994(平成6)年の《有頂天》などの仏教をテーマにした作品がしばしば描かれている。

以上、仏道修行を軸にして、白髪の1970年代をたどってきた。この時期の作品は、これまで高い評価を受けてきたとはいえない。具体美術協会の時期がもっとも充実していたという研究者も多い。白髪の回顧展が開かれる際、1970年代の作品が選ばれることも少ない。しかし、30歳代後半から関心をもち始め、天台僧としての修行を十全に積み重ねた白髪の世界のなかで、仏教の占める部分はきわめて重要だったと考えられる。

次節では、1972年に制作された《観音普陀落浄土》と《東方浄瑠璃世界》を例にとって、一つの仮説を核にして白髪と仏教の交錯する様を具体的に考えてみたい。

3. 白髪一雄と法華経—《観音普陀落浄土》と《東方浄瑠璃世界》

白髪が愛蔵した書籍は、現在、白髪家から尼崎市総合文化センターに寄託されている。そのなかに仏教関係のものが約100冊含まれる。そのうち仏教美術関連の書籍や画集はきわめて少なく、ほとんどが仏教思想や経典、仏教学などのいわゆる仏教書である。なかには天台学のかなり専門的な研究書もあり、白髪が比叡山での行と平行して、あるいはそれに取り組む前から、真摯に教学を学んでいたことを教えてくれる。

宗祖・最澄が天台法華宗と称していたことが示すように、天台宗の根本経典は『法華経』である。『法華経』は、紀元後1世紀、当時は異端であった大乘仏教集団によって西北インドで成立したと考えられている。サンスクリット語で『サッドルマ・プンダリーカ』(Saddharma-pundarika)という。その漢訳は3つ伝わるが、西晋の竺法護(239-316、Dharmarakṣa)は「正法華経」と訳し(268年)、姚秦の鳩摩羅什(344-413、Kumarajiva)は「妙法蓮華経」と訳した(406年)。日本の岩本裕は「正しい教えの白蓮」(1967年)と、植木雅俊は「白蓮華のように最も勝れた正しい教え」(2008年)と現代語訳している。名訳だったため、漢訳は鳩摩羅什のものもっぱら用いられ、日本でも同様であった。周知のように、日本では近代以前、仏教典は和訳されることがなく、漢訳のまま流布する。長らく漢訳の『法華経』しか世に伝わらなかったが、

約200年前、サンスクリット本が発見されてその研究は一気に進んだ。

ちなみに白髪に《サ・ダルマ・ブンダリーカ・ストラ》(兵庫県立美術館、fig.3) という1975年の作品がある。黒い地に白い円相を大きく描いたもので、白蓮華をモチーフにしたものにちがいない。他の仏教主題の作品名がすべて漢語であるのに対し、これだけがサンスクリット語をカタカナ表記しているのがたいへん興味深い。白髪にとって『法華経』が特別な意味を持っていたことを示唆するものといえよう。

『法華経』の教えを概説するのは、筆者の能力をはるかに超える。一つだけ強調しておきたいのは、「法華経が、人間は誰でも差別なく、一人残らず成仏できると説いている」¹⁵⁾ ことである。『法華経』の影響を受けて成立した『涅槃経』も「一切衆生悉有仏性(いっさいしゅじょうしつゆうぶっしょう)」と説いている。『法華経』は出家と在家の別、あるいは男女の性別に関わりなく、だれでもが悟りを開いて仏になれる可能性を持っていることを主張する。菩薩と声聞、縁覚の三乗のうち菩薩のみ、また男子のみが成仏できるとしていた、のちに小乗と呼ばれることになる初期仏教教団にとっては、きわめて危険な、異端といってもよい思想だった。最澄が、法相宗の徳一(749-824)とあしかげ9年にわたり繰り広げる「三一権実諍論」もこの一乗論(だれでもが成仏できる)と三乗論(選ばれたものだけが成仏できる)とのあいだの対決だったし、良源の名声を高めることになった963(応和3)年の「応和の宗論」も同じテーマの論争だった。

「一切衆生悉有仏性」の思想は、日本の天台宗のなかでやがて11世紀から12世紀にかけて、天台本覚思想に発展していく。人間だけではなく他の動植物、あるいはすべての物質に仏性があるという「草木国土悉皆成仏」の思想が立ち上がってくる。これは中世以降、文学や美術、能楽、生け花など広くさまざまな日本文化に大きな影響を与えていくことになった。『法華経』は数ある仏教典のなかで、日本文化にもっとも大きな作用を及ぼしたものの一つである。

白髪も、当然のことであるが『法華経』を熟読していたのは間違いない。日蓮宗に深く帰依していた祖母は『法華経』を朝夕読経し、それを耳にしながら白髪は育っている。旧蔵書のなかには、岩波文庫版の、1970(昭和45)年4月発行の『法華経(上)』第1版第11刷、1969(昭和44)年5月発行の『法華経(中)』第1版第7刷、1970(昭和45)年5月発行の『法華経(下)』第1版第5刷が含まれる。おそらく得度した1971年前後にまとめて購入したものだろう。のちに「法華経(サ・ダルマ・ブンダリーカ・ストラ)」という題名の油彩画も描いているのであるから、具体的なイメージができあがるほどに、白髪自身のなかで法華思想を熟成させていたはずである。

さて、兵庫県立美術館が所蔵する《東方浄瑠璃世界》(fig.4)とプリチストン美術館の所蔵する《観音普陀落浄土》(fig.5)は、2点そろってともに1972年7月、メキシコのMuseo de Ciencias y de la UNMAでの展覧会Arte Japones de Vanguardiaに出品され、同年12月にミラノのPalazzo Dellasoc Eta per Le Bella Artie ed Esposizione di Miranoでの展覧会

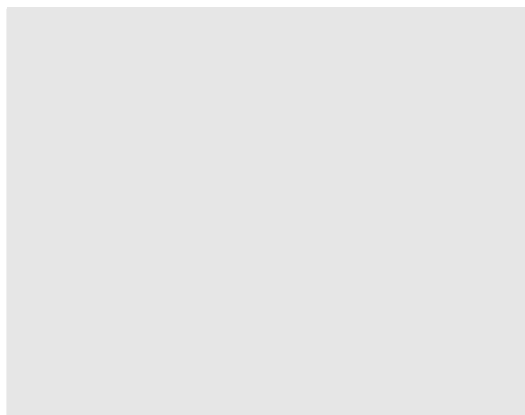


fig.3
白髪一雄《サ・ダルマ・ブンダリーカ・ストラ》1975年、油彩・カンヴァス、兵庫県立美術館所蔵

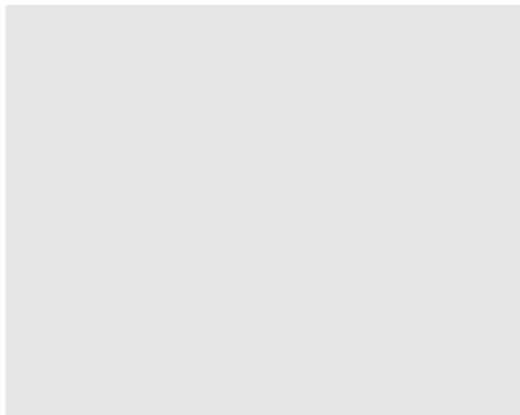


fig.4
白髪一雄《東方浄瑠璃世界》1972年、アルキド絵具・カンヴァス、兵庫県立美術館所蔵

Arte Contemporanea del Giapponeに出品された。

《観音普陀落浄土》は、鮮やかな赤を基調とする地色に、左上から右下へ白と青の絵具をスキージで滑らせて途中で屈曲させながら押し流し、右上から左下へは赤と黄色の絵具を対称となるように滑らせている。滝のような、あるいは水の動きを想起させる絵具の痕跡を見せている。多数の原色が踊っている画面だが、不思議と騒がしさは感じられない。裏面には、下記のような白髪による書き込みがある。

「観音普陀落浄土」昭和四十七年五月白髪一雄 / Kazuo Shiraga 1972.5

一方、《東方浄瑠璃世界》は地色を明るく澄んだ青として、左から水平に黒、緑、青の絵具をスキージで押し流し、また中央から右下へ同様の絵具を屈曲させながら滑らせている。静謐さと鋭利さが同居した作品とってよい。裏面には下記のような書き込みがある。

K. Shiraga 1972.4 / “東方浄瑠璃世界” 昭和四十七年四月作 白髪一雄¹⁶⁾

これらの年記は、2点が立て続けに間をおかずに描かれたことを示している。大きさこそ異なるが、その後の出展状況を考慮しても、2点が当初から密接な関係をもって制作された二連作である可能性が高い。

ここで指摘しておきたいのは、1972年前半が白髪にとってもう一つの重要な転機を迎えていたことである。具体を牽引してきた吉原治良が2月10

日に67歳で亡くなる。残されたメンバーは協議し、3月31日をもって具体美術協会は解散した。白髪はあらたな精神的な拠り所をもつ必要に迫られたのである。そこに入り込んだのが、天台仏教だった。白髪は前年5月に得度している。吉原と入れ替わるように、山田恵謐が白髪の師となった。前述のインタビューでの「吉原先生はもうそのとき亡くなってたんですが、これ（《東方浄瑠璃世界》1972年）なんかねえ、すっきりして」という白髪という言葉には、そうした背景が滲んでいる。

《観音普陀落浄土》と《東方浄瑠璃世界》は、おそらく具体美術協会解散後、最初に制作された作品だろう。この2点の背景にあるのが『法華経』だという仮説をここで立ててみたい。《観音普陀落浄土》は『法華経』の「観世音菩薩普門品第二十五」を絵画化したものという仮説である。この「観世音菩薩普門品第二十五」には下記のような記述がある。

ローケシュヴァラ=ラージャ（世自在王）を指導者とした僧のダルマカラ（法蔵）は、世界から供養されて、幾百劫という多年のあいだ修行して、汚れない最上の「さとり」に到達してアミターバ（無量光）如来となった。アヴァローキテーシュヴァラ（観世音菩薩）はアミターバ仏の右側あるいは左側に立ち、かの仏を扇ぎつつ、幻にひとしい一切の国土において、仏に香を供養した。西方に、幸福の鉱脈である汚れないスカヴァーティー（極楽）世界がある。そこに、いま、アミターバ仏は人間の御者として住む。¹⁷⁾（下線は引用者）

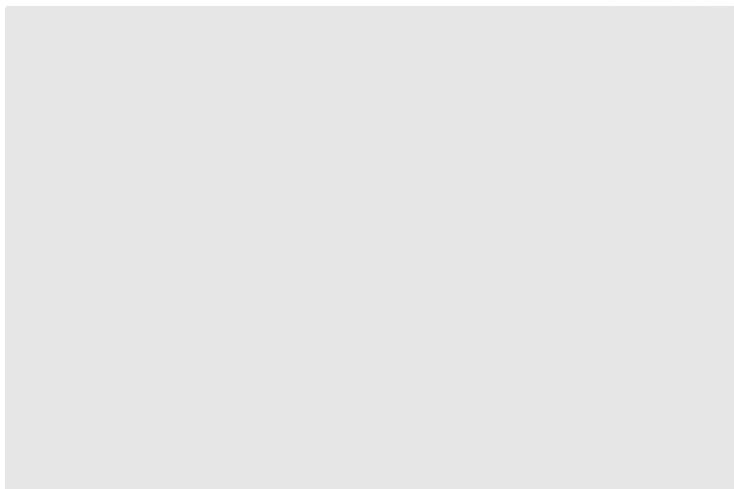


fig.5
白髪一雄《観音普陀落浄土》1972年、
アルキド絵具・カンヴァス、石橋財団
ブリヂストン美術館所蔵

これは岩波文庫版『法華経（下）』にある、サンسكريット本からの岩本裕による現代語訳で、この部分にあたる漢訳は存在しない。「アミターバ（無量光）如来」とは阿弥陀如来のことで、その浄土は西方にあり、その脇土として従う観世音菩薩もその西方阿弥陀浄土にいる。白髪の旧蔵書には岩波文庫版『浄土三部経（上・下）』や山口光円『天台浄土教史』などがあり、もちろん浄土教の基本も熟知していたはずである。この「観世音菩薩普門品第二十五」をもとにイメージ化したのが《観音普陀落浄土》だと推測してみたい。この「観世音菩薩普門品第二十五」は独立して「観音経」とも呼ばれ、中国や日本で盛んになる観音信仰の根本となった。

一方、『法華経』のなかで、東方にある浄土世界に触れている箇所は二度登場する。一つは「妙音菩薩品第二十四」であり、もう一つは「普賢菩薩勸発品第二十八」である。前者は次のような記述である。

爾時釋迦牟尼佛。放大人相。肉髻光明。及放眉間。白毫相光。遍照東方。百八万億。那由他。恒河沙等。諸佛世界。過是數已。有世界。名淨光莊嚴。其國有佛。号淨華宿王智如来。應供。正遍知。明行足。善逝。世間解。無上士。調御丈夫。天人師。佛。世尊。爲無量無邊。菩薩大衆。恭敬圍繞。而爲說法。釋迦牟尼佛。白毫光明。遍照其國。爾時一切。淨光莊嚴國中。有一菩薩。名曰妙音。

その時、釈迦牟尼仏は大人相の肉髻より光明を放ち、及び眉間の白毫相より光を放ちて、遍く東方百八万億那由他の恒河の沙に等しき諸仏の世界を照らしたもう。この数を過ぎ已りて世界有り、淨光莊嚴と名づく。その国に仏有して、淨華宿王智如来・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・仏・世尊と号けたてまつる。無量無邊の菩薩の大衆は恭敬し圍繞せるを爲つて、爲に法を説きたもう。釈迦牟尼仏の白毫の光明は遍くその国を照らしたもう。その時、一切淨光莊嚴国の中に、一の菩薩あり、名を妙音と曰う。¹⁸⁾（下線は引用者）

後者の「普賢菩薩勸発品第二十八」には、以下のような記述がある。

爾時普賢菩薩。以自在神通力。威徳名聞。與大菩薩。無量無邊。不可稱數。從東方來。所經諸國。普皆震動。雨寶蓮華。作無量百千万億。種種伎樂。

その時、普賢菩薩は自在なる神通力と威徳と名聞を以いて、大菩薩の無量無邊の不可称数なるとともに東方より来たれり。経たる所の諸国は、普く皆震動し、宝の蓮華を雨らし、無量百千万億の種種の伎樂を作せり。¹⁹⁾（下線部は引用者）

どちらの章を典拠にしたのか、あるいは双方を取り込んでいたものか、現在のところ判断がつかない。しかし、日が没する西方の赤、朝を思わせる東方の青を対比させ、スキージ状の器具を用いてアルキド絵具を押し流す共通の表現は、2作品が同じ『法華経』にあらわされた菩薩たちが住む二つの浄土をイメージしたものであることは、十分に想定することが可能だろう。天台宗の根本經典である『法華経』の絵画化は、当時の白髪にとって魅力的な主題だったはずである。具体美術協会解散後ただちに、白髪は繰り返し愛読していた『法華経』から2作品の組み合わせを構想し、4月に《東方浄瑠璃世界》を、翌月、《観音普陀落浄土》を制作したと考えられる。

『法華経』の絵画化はおそらく、この2作品の2年後、前述した1974（昭和49）年8月、信濃橋画廊での「法華経のデッサン—諸法実相 白髪一雄作品展」が一つのピークになっている。これは加行を満行後2か月で開催した個展で、「円が描けるようになった」直後の作品群が発表された。目録も写真資料も未見だが、取材した読売新聞記者は次のように作品内容を記している。

「諸仏舌相」「女人成仏」「三界火宅」など周知の説話をやや具象味を帯びた形態で暗示的に造形化した作品、「三諦円融」「三昧」など、この聖典から天台宗が抽出した仏と人が一体になる境地の哲理を、色彩の帯状、渦状の線条によって莊嚴化した表現、「普賢菩薩」「四天王」など超能力者の力を梵字（ぼんじ）の図像の助けを借りながら、抽象表現主義の絵画の力強さに生かしたもの——三種類の法華経へのアプローチが多彩なイメージに結晶し、個人の想像力に頼る抽象絵画が陥りがちな単調さをまぬがれている。²⁰⁾

『法華経』はめくるめく修飾や比喩、想像力豊かな説話に彩られた文学作品とも読むことができる。その多様な魅力を、白髪は三つに括られる方法であらわそうとしたらしい。「ずっと描けるようになった」円も登場していたはずだが、《諸仏舌相》（奈良県立美術館）にドリッピングを用い

ているように、その表現はさまざまだったようだ。こうした『法華経』の絵画化は、繰り返すが《東方淨瑠璃世界》と《観音普陀落浄土》が出発点だったように思われるのである。

最後に、白髪作品制作についての天台仏教の意味をもう一度まとめ直してみよう。第一に、制作する前に主題を強く意識するようになったことである。水滸伝シリーズのほとんどが、作品が完成してからそれにふさわしいと思われる豪傑名を与えていったことなどと異なり、仏教シリーズは、先に主題が存在しそれから表現が生成していくプロセスだった。きわめて知的な操作である。アクションペインターである白髪が精神と身体の一元化を図るために、仏教はきわめて有効なツールだったといえる。

第二に、仏道修行の体験を通してその表現に透明感や簡潔さが生まれたことである。60年代にアクの強い、濃厚な絵具の塊と素足で格闘していた白髪は、70年代に、道具を手で用いた描法を併用するようになる。同時に顔料の選択が急速に洗練されていく。白髪によると、このことは周囲からたびたび指摘されたことであり、自分でも意識していたようだ。こうした変化を生み出したのは、山岳宗教でもある天台宗、比叡山延暦寺での行だったと考えられる。

第三に、1972年から80年までのわずか8年間のあいだに、表現が多様に進展していった経験である。フットペインティングからスキー状の器具を用いて大胆に絵具を押し流していく描法。そして円輪（円相）。梵字も取り入れられることがあった。仏や経典を思念しながら生み出されていく表現は、多様な仏教主題の変奏となっていた。そして再び身体性の強いフットペインティングに回帰していく流れは、白髪の画業のなかでも極めて流動性の高い濃密な変遷となった。この変遷は、制作と並行して進められた仏道修行によって支えられていたのである。フットペインティングに回帰した80年代以降も、70年代の体験は色濃く影を落としている。一度会得した簡潔さは失われることなく、広く東洋思想に依拠しながら白髪制作は続いていった。

こうした仏教と斬り結ぶ白髪の旅の出発点に、ブリヂストン美術館が所蔵する《観音普陀落浄土》が位置しているのである。

註：

- 1) 平井章一「白髪一雄のアクション・ペインティング」『白髪一雄展—格闘から生まれた絵画—』（図録）、白髪一雄展実行委員会、2009年。

- 2) 白髪一雄「文殊菩薩供について」『尼崎商工会議所報』275号、1977年7月。
- 3) (松)「宗教 道を求めて 真言唱え画面で燃焼 画家と不動尊」『読売新聞（大阪本社版）』1979年11月6日付。
- 4) 白髪一雄「市民芸術賞受賞後の作家達（2）精神的なものを画面にもとめて」『芸術文化ニュースいずみ』2号、1975年11月。
- 5) 白髪一雄「人物往来（45）酒と仏と絵と足と」『ともしび』92号、2004年8月。
- 6) 天台宗公式ウェブサイトwww.tendai.or.jp。2016年1月11日アクセス。
- 7) 山田恵諦『比叡山延暦寺座主 山田恵諦法話集』平凡社、1980年、100-101頁。
- 8) 「日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴ 白髪一雄インタビュー2 2007年9月6日」。http://www.oralarthistory.org/archives/shiraga_kazuo/interview_02.php。2016年1月10日アクセス。
- 9) 山田能裕「序文」『白髪一雄展』（図録）、株式会社カサハラ画廊、1990年11月26日。
- 10) 白髪一雄「人物往来（45）酒と仏と絵と足と」『ともしび』92号、2004年8月。
- 11) 西川昌宏「青春プレイバック白髪一雄」『新美術新聞』2000年5月11・21日合併号。
- 12) 司馬遼太郎『街道をゆく16 叡山の諸道』朝日新聞社、1981年11月。初出は、1979年10月から1980年3月まで『週刊朝日』に連載されたものである。
- 13) 司馬遼太郎『街道をゆく16（新装版）叡山の諸道』朝日新聞社、2008年11月、270頁。
- 14) 「日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴ 白髪一雄インタビュー2 2007年9月6日」。http://www.oralarthistory.org/archives/shiraga_kazuo/interview_02.php。2016年1月10日アクセス。
- 15) 橋爪大三郎・植木雅俊『ほんとうの法華経』ちくま新書、2015年10月、17頁。
- 16) 西田桐子氏（兵庫県立美術館）のご教示による。
- 17) 『法華経（下）』岩波文庫、1967年、267-269頁。
- 18) 同上、212頁。
- 19) 同上、316頁。
- 20) (安)「美術 白髪一雄展 造形化した古代宗教」『読売新聞（大阪本社版）』1974年8月8日夕刊。

追記：本稿をまとめるにあたり、ご遺族の白髪久雄氏、尼崎市総合文化センターの妹尾綾氏、兵庫県立美術館の西田桐子氏、鈴木慈子氏、橘美貴氏に多大なご協力をいただきました。ここに記して謝意を表します。